

## 言葉にすれば、自然と音は

Pさん

ここにいながらにして、ある空間、ある時期のことを空想する、あるいは想い出す。その瞬間、身はわずかに垂直に持ち上がるような心地がする、だろうか。

「ここ」と「ある空間」とに自分の身が所在しているという風に、イメージ出来ないことによるそれは弊害なのだろう。弊害なのだろうか。弊害なのかもしれない。とにかく、横に動くのではなく、垂直移動をイメージすることによって、「その場において、かつ違う場にいる」ことを表現する。

その際、表現は自分に向かって行われる。

この桐箆笥は母の嫁入り道具らしい。嫁入り道具というのが何か分からない。どこから母に渡されたものなのか、その時購入されたものなのか、とにかく、悪魔的表情をした木目が常にこちらを見ている、桐箆笥は、母の婚姻の瞬間と係っている、というのは、確からしい。

ビックリマンチョコの「魔肖ネロ」と、その表情はソックリなのだ。

そもそも「魔肖」って一体なんなのか、これが進化すると「ネロ魔身」になるということは中心的な名前は「ネロ」なのだろうがとにかくあいまいな神話の組み合わせだ。そうでないものなどどこにも存在しない。魔肖ネロはあらゆるエネルギーを吸収していつて肥大しどんどん強大になっていく。だがある大きさを境にして自壊が始まり、トカゲみたいなシルエットの邪悪なミツ〇ーみたいな魔肖ネロは骨だけになりネロ魔身になるのだ。

ネロ魔身はブラックホールみたいに自身のエネルギーが爆縮して死ぬ。壮大な宇宙船の骨組みを見るようなネロ魔身の骨がどんどん罅割れて内壊していくのだ。それがカッコよくて子供の頃の自分は鏡で見たら自分の眼が同心円になっているんじゃないかというくらい凝視して没入していた。

ブラックホールは同じく神話だ。なのでどこまでいってもそれは神話と神話の掛け合わせであり、先程も申し上げた通りそうではないものなどどこにもない。

幼少期の魅惑され（す）る視線はわたしに向かって反転され恐怖に変わり桐箆笥に蒸着した。

この中にもう服は入っていない。違う話にしよう。

ここにいながらにして、ある空間、ある時期のことを空想する、あるいは想い出す。その瞬間、身はわずかに垂直に持ち上がるような心地がする、だろうか。

本来ならば限界まで同じ一つ身として空想しなければいけないところを、人間の想像力が空間の可能に限定されているおかげで、垂直に持ち上がるように想像せざるを得ないのだ。

鉛筆を持つ手が強ばる。先日久しぶりに試験と名の付くものを受けて、それは学生時代の苛烈な濃度を含んでおらず、ずいぶん気の抜けたものだったのだが、マークシートを塗り潰すために自前の鉛筆とそれを消すための消しゴムが必要だった。

無限機関などに情熱を燃やして万能感に飢えていた少年期は、鉛筆とボールペンだったら、圧倒的に何度も消して書き直せる鉛筆が最高の筆記具で、ボールペンで文字が書かれることに恐怖すら覚えるくらいだったのだが、ある時を境に反転した。

鉛筆で縦書きを続けていると右掌というか小指側の側面に絶えざる書き取りの疲労と筋肉の強ばりの感覚と、「鉛」という語感と見た目とが相まって、黒というより銀に近い膜が発生した。それが私には確実に「毒の付着」としか思えなかった。

「鉛筆を濃くするために先を舐めて濡らすのは、鉛筆の中に鉛が入っていて毒だからやめた方がいい」と言われていたのはもう一世代前で、自分の世代は「それはデマだ、鉛筆の芯は鉛ではなく黒鉛で、ダイヤモンドやカーボナイトなど多彩な同素体をもつ炭素の一形態であり、炭素原子が平面上に正六角形の結晶を持つことによって成る。」

カーボンナノチューブやカーボンナノファイバーなどといったSFや理論科学の玩具であったものが現在では実用運営段階に入っている。目覚ましいくらいの科学の精華Ⅱ成果だと言わざるを得ないだろう。言わない者はいない。いや、私が言わせない。教室の一隅で、夕陽を浴びながらひとり鉛筆で化学式や分子構造を何度も何度も清書し、その手をふと止め、鉛筆というこのものも、エタノールやポリスチレンなどとは比べものにならないくらい単純な構造を持った、それこそ電子の密な交換によって結びついたのではない、たんに分子間力（ものが静電気で引き寄せられるのではなく、引力によって引き合わせられるような状態）のみで結合しているようなものではあるが、それでも一つの構造をなしているのだなあと、その先を見つめ、凝視しているうちに本当にその分子が、あり得ないにしても、この眼に見えたような気がして、いつの間にか、その世界に移行している――

黒鉛の分子結合は巨視的に見ても観測できるような結晶ではな

く、ナノ単位の柱や薄片が折り重なるようにして成っている。一つ一つの単位が平面であるので、その面としての結びつきはそこそこ強力なのであるが面と面はほぼ重なっているだけなのだ。だからその単位で崩れ去り剥離する。

彼が降り立ったところは巨大な、分子千単位の円柱が斜めに傾いでいるところを、不完全に結晶化した瓦礫のような十単位の大の塊が折り重なって支えている場所だった。彼のイメージの中でそれは暗い線條の細やかな差し渡しであるとともに、ギリシアの建築が崩れる途中でかろうじて均衡を保っているというようなある風景との、同時には提示することのできない合成物だった。半分醒めている意識で、彼は自分の中にこういう風景を見るほど、自分は詩人というか、なんかそんなような能力を擁している人間だったのかと、意外に思った。

足下を電子である狐が視えない速度で過ぎ去る。私はさつき説明する際、炭素は分子間力で結びついている“などと適当なことを言ったけれども、彼はそんなのはまるで不正確であることを知っている。炭素だって、いや炭素こそが、その“電子の足”を隣り合った三つの炭素原子と共有している、とんでもなく強い電子的結びつきのある本来は強固な物質なのだ。だからこそ、カーボンナノファイバーやダイヤモンドほどの硬度や強度を持つことが出来る。

分子間力によって結びついているものなんて、それこそ、二酸化炭素が固形化したドライアイスくらいのものだ。

「不正確だ！」という風にカウンターとしてよく言われていて、小学生の頃にもそれくらいのこととは知識として知っていたのだが、それと感覚的理解とは違う。別の話にしよう。

この時間この場所に結びつけられていながら、ほんのおずかにも違う空間、違う位相のことを思うことは、禁じられていないことだとしても、なんと難しいことだろう。と同時に、なんと軽やかに行われることだろう。

道の説明を頼まれた。自分もずいぶんと遠出をしてきたから、この土地の詳しいことは分からないが、今訊かれている当の駅から来たのだから、それくらいは説明できる。

「今、われわれの右に歩道がありますね。左側は路側帯だけで、向こうに信号が見えますね。信号は、割と低い位置にありますね。あなたなら、手が届くのではないですか。

信号器の下には交番がありますね。ただ、中にいるはずの巡査は今巡回中であると、二等辺三角形を底辺とした三角柱の形に折った厚紙を立てて、先ほど見たところによるとそう書いてあつ

たのですね、だからあなたがああ交番の前に行って、その前にちよつと信号に触れるか触れないか、ただ、信号もなかなかよく考えると高い位置に据えてあるから、よつぽど背を伸ばさない限り、難しいのではないかと思いますが、とにかく触れて、その後で巡査に尋ねよう、と仮に思っているのだとしたら、その目的は達することができないであろうと、先に釘を刺しておきます。

この道は片道二車線になっていきますね。制限速度は五十キロですから、われわれから見て左側にある、車道に出るのは危ないですね。最近では、車幅に余裕のある道には、自転車専用レーンが設けられているところがあります。あれはまず、青い塗料を塗りつけてから、ガスバーナーで焼くことによつて、標識を固めているのですね。塗料を塗る係りと、バーナーを持っている係りの人とは、およそ十メートルくらいの距離を保ちながら、地道に作業を進めていたのですが、東京とはいえ少し西よりの、都心部からは外れていると言わざるを得ないこのあたりの地域では、まだ設けられていないですね。

路肩が剥き出しになっています。アスファルトが土の方に崩れるままになっていて、土には、およそ膝くらいの高さはあるかどうかと思われる、枯れた雑草が生えていて、左側の車道は歩きにくいでしょう。歩きにくいと思います。歩きますか？ 獣道と呼ばれる、なにもものかが踏み倒していった跡なども特にないのだから、おすすめしないです」

「はーあ？」

「その信号を右折して真っ直ぐ行つたところですよ」

アジア人に説明を終えてから、そのあとさらに少し右折しなかつたら、駅が完全に見えたことにはならないということに気が付いて、追いかけて訂正しようと思つたが、別の話にしよう。

部屋の一隅に身を横たえているとき、昨日も、一昨日も、その前もずっとそこに身を横たえていた、この場所を棺桶のように想像し、威厳のある線対称の多角形を底辺とした角柱に空間を、想像の中で区切る。

天井に定点カメラを設置し、毎日同じ時刻に映像を切り取るのと、まるで私がそこにいながらにして伸び広がるように見えるだろう。

今はちよつと、想像している誰かが最初に想定した棺桶のサイズにピッタリ一致したところで、まだ映像は完全には現像されておらず、黒く赤い光に満ちた現像室に洗濯バサミで吊されているところだ。

それが昨日と、一昨日と、その前の三日間のもので、まだ当時

はポラロイドカメラくらいしか、その場で画像を確認できる媒体はなかった。

高級品の代名詞の一つであったポラロイドカメラが高級でなくなつて、岡村隆史がCMをやつていた「ヒツパレー」など、小型ポラロイドカメラが女子高生など学生をメインターゲットに据えて開発、販売され始めたのは、自分が中学生くらい頃だ。

そのCMに、矢部浩之も出演していたかもしれない。もう一人、女性がいたかもしれない。女性がその場にいることによつて、女子高生などは、等身大の自分（プラスチック、つまり自分より少し派手好きであか抜けている、背伸びした自分）があたかもそこにいるように感情移入することができ、「ヒツパレー」を使つて、友達と写真を撮りあつて、「楽しい自分」を、軽々と想像することが可能になるのだ。

三人とも、シャンペングラスを持っていたかもしれない。シャンペングラスは、細長い。底から沸き上がる泡を陶然と見つめ続けているだけで軽く六時間は過ごせるのである。ヒツパレーを持つ三人は、そんな違も作らずに、騒いでいる途中なのだ。う、それどころか、この口の狭く細長いフルートグラスから、シャンペンをこぼしかねない勢いで動き回り、仲間をかき集めていることだろう。

そのような瞬間を見事に活写したCM。別の話にしよう。

現在作曲された中で一番長い曲を演奏し終わるのに千年かかる。二千年に演奏が開始されて三千年に終了するのだという。その曲だったか、他の七百年近くかかる曲だったかは失念したが、どちらかがパイプオルガンで演奏されて、どちらかが鐘で演奏されている。

鐘の鳴る音はいつ終了するのか。残響を止めずに耳を近づけていると優に数分間は鳴り続けていて、キリがない、鐘に触れないのに音が減衰するのは振動するとき空気抵抗があるからなのだが、純粋に空気抵抗の力によつて減衰するのは鐘が理想状態にあるときであつて、何らかの形で吊さなければならぬその紐か糸かの接点か、ほとんどの響きを吸収してしまうのだ。

鐘を鎮かに止めるのも難しい。チャイニーズゴング、銅鑼、別名をタム・タムというが（何でタム・タムというのか知らないが、ドラムスの部品の中にあるトム・トムと非常に紛らわしい）の残響を止めるときに正攻法は「撥で表面をグルグル回しながら擦る」で、銅鑼の撥はたいがい異常に大きくフワフワしていて、撥界の中でも巨大な部類に入るバス・ドラムを以てしても、いざそれで打ち鳴らすと「コーン」という堅い音がするほどで、銅鑼

専用の撥はもつと表面がフワフワしていてそして重い、打ち鳴らすときに慣性の法則を計算していなければ、確実にタイミングを外すほどだ。

ところが吹奏楽部の下品な女子部員の先輩はケツを当てて音を消していた。練習中に、本番と同じ音の消し方をする必要も特にないし、むしろ途中で曲を止めるときに一緒に止まってくれないと邪魔ですらある。

下品な女子部員の先輩は受験を理由に、他の同学年の部員と比べても滅多にこの部室に来なくなったのだが、「この曲懐かしいからやりたい」と言つて、練習だけ飛び入り参加して、鮮やかな腕前を発揮した。銅鑼は本来その曲の中でほとんど出番がなく、バス・ドラムと兼ね役で演奏することも出来るように、作曲家も計算して作曲しているのだが、それでも飛び入りでその人が突然舞い込んできても、曲の流れとかパーカッション・パート全体の動線に一つの乱れもなくこなしている様は、その3+1人が一つの有機体であるかのようにだった。その曲全体が彼らにとって一つの庭のようなもので、真剣に、しかし余裕を持って稼働しているその様を私たちはアゴを外しながら眺めているしかなかった。別の話にしよう。

音は消え去る。音を記述しようとする試みは全て失敗に終わった。音を生産することも出来ない。完全に設計図を元にするのだとしたら、そうだ。

コンピュータ内に音を生成させるブラックボックスを作ったとしても、ある時それを起動させるのは、血管の浮き出た三十代後半の人間の手指により、しかもブラックボックスを作成するとき、ひとの迷いが、その匂いが混入する。

ウーファーに凝っている友人が、魂の流れのようなTB・303の響きわたる曲を紹介してくれて、それを持って帰って聞くのだが、その揺らぎは我が家の音響に移植されるにいたってごつそりと抜け落ちてしまった。

仮にその曲が192k b p sであろうと、320k b p sであろうと、44.1k H zが艶々した表面をさらしていようと、D V Dオーディオであろうと、肝心のスピーカーがこれでは、再現性もへったくれも、あったものじゃない。

ただその友人にしてからが、ウーファーというのはヤブーオーションで中古で買い取ったもので、しかもスピーカーのコーンの部分が剥き出しで、いわゆる「スピーカー」の箱には収まっていない。

「ひたすらパワフルであれ」というそのウーファーが、20H z

以下の低音を、どれだけ強調するのか知らないが、そしてそれが魂の源泉であるのか知らないけれども、それも、再現するという指向からは外れている。

一方で、レトロな電子ベースのTB・303を自在に操るそのミュージシャンの内面は、どうなっているだろうか。TB・303が「正しく再生される音響」など、どこにも存在しない。それは原初から半径6・3ミリ口径の3極フォーンプラグが伸びているだけで、その電圧変化がその先どうなるかが、TB・303は知らない、ただ、それが差し込まれた先を、奔放に打ち鳴らす。

ウーファーは、その場で演奏される。魂は、コーンの薄膜の上にくらぎ立つ。だって、他のどこにも存在するとは言えないのだから。

音は、たしかに存在したという場所が、どこにもない。

かつて分岐点があった。それとはわからない、空間には展開し切れない分岐点が。

その一方では、私はボンゴを股間に挟み、軽快に打ち鳴らしている。オーケストラなどではスタンドに固定したりもするが、本式の構えは股間だ。私は常に膝丈か、それより低い椅子に座り、両膝で二つの太鼓を挟むようにしている。

想像の中で、私は雑にペンキで色を塗った、漆喰だけで塗り固めたような住居の壁を背に、そこに座っていて、目の前は礫というか小石と、くるぶし以上の高さにならないパイナップルの葉みたいな雑草が、まばらにあるだけの荒野が広がっている。音を聞きつけて、仲間が数人だけ、何時というのも気にせず、寄ってくる。

分岐のもう一方では、どこにも置き場がないので、仕方なく股間にポメラを構えて、言葉を打ち鳴らしている。